

徳島県の教育旅行受け入れ先進地視察会 体験提供施設・受入家庭の視察

令和7年3月18日(火曜日)～19日(水曜日)に教育旅行受け入れの先進地である徳島県美波町、牟岐町、海陽町に赴き、体験提供施設や受け入れ家庭への視察を行いました。



VOL.1 マリン体験提供施設「マリンジヤム」

豊かな環境を活かした体験コンテンツ



海が近いのでシュノーケリングやシーカヤックなど、修学旅行生に人気の海のマリン体験ができます。

南阿波よくばり体験では、山・川・海が隣接する豊かな環境を活かし、64種類の体験コンテンツを提供しています。徳島県内では、西・東・南の3地域がそれぞれの特色を活かして教育旅行の受け入れに力を入れており、関西圏や広島から訪れる修学旅行生には特に海のマリン体験が人気です。マリンジヤムではシュノーケリングやシーカヤック、自生するサングソの観察など、海の魅力を間近で感じられる様々なプログラムを体験できます。



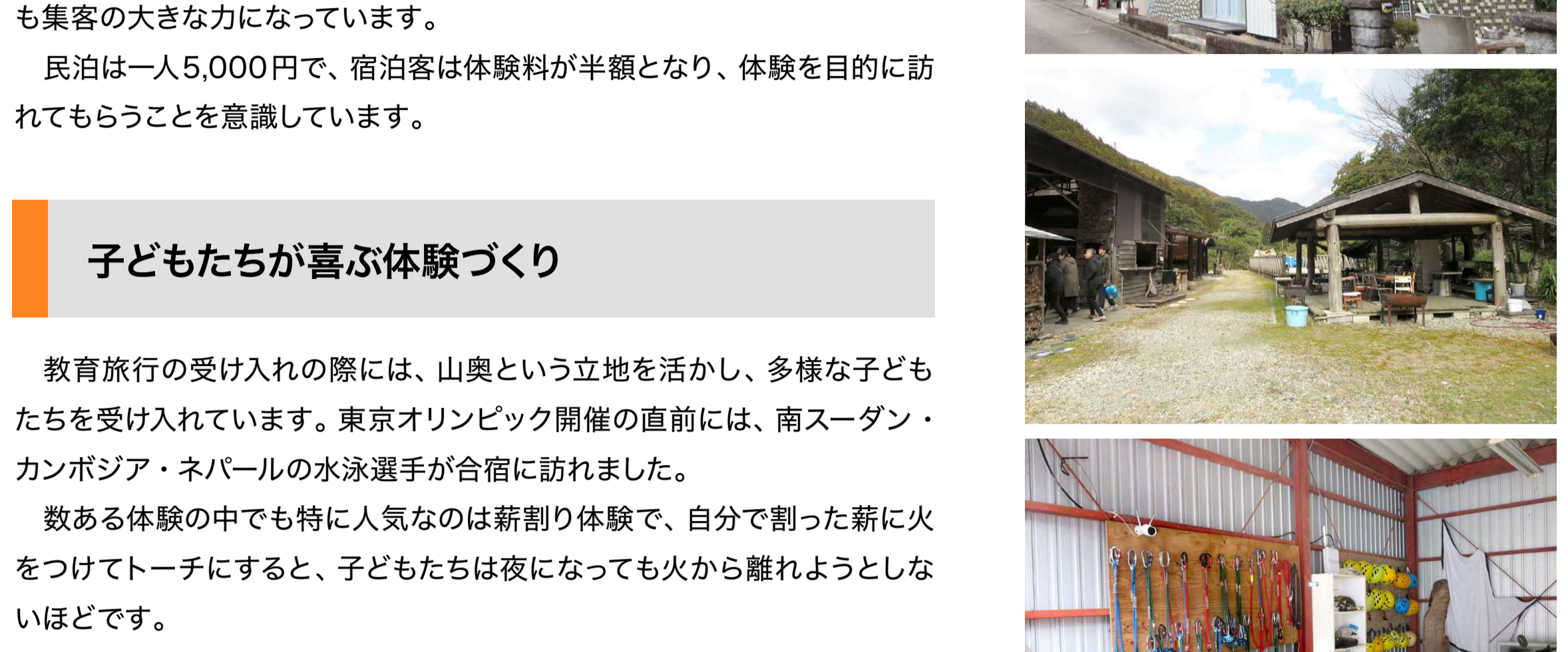
VOL.2 教育旅行入村式会場「阿波海南文化村」

DMVが発着する複合施設



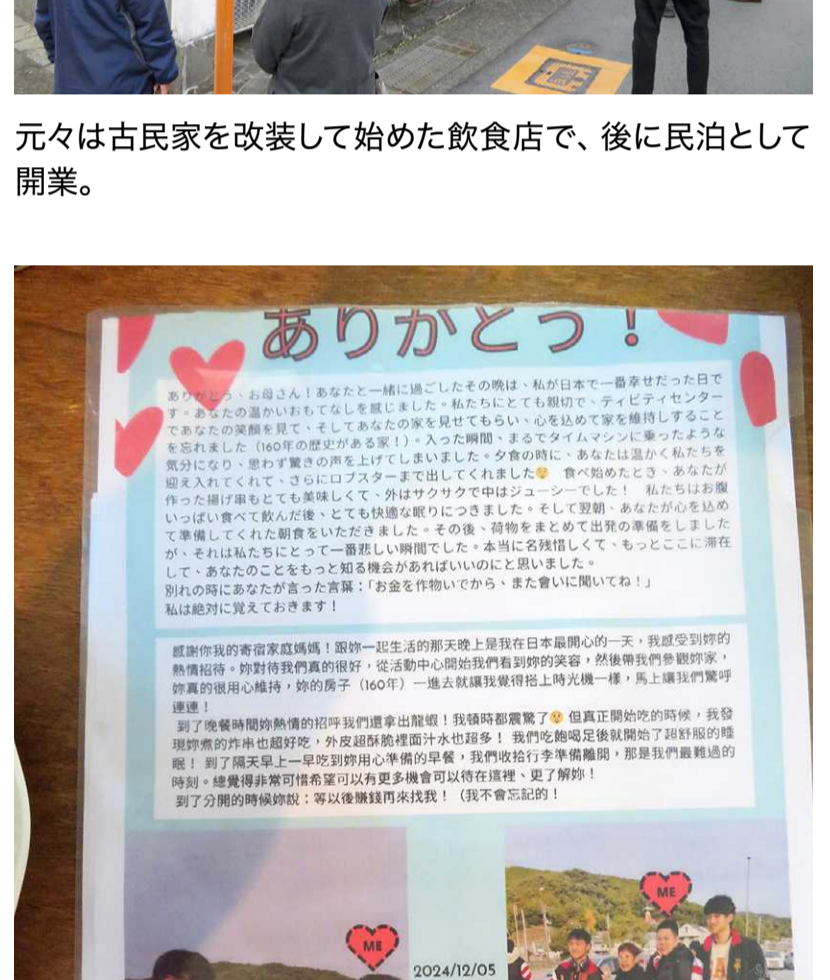
伝統工芸品を制作したり、監染ができる体験スペースがあります。

阿波海南文化村は、阿佐海岸鉄道のDMV(デュアル・モード・ビークル)の発着駅でもある施設です。敷地内には広い駐車場のほか、DMV紹介スペースや会議室が併設されています。施設には伝統工芸品づくりや藍染めを体験できるスペースがあり、町教育委員会の執務室も入る複合施設となっています。



VOL.3 農家民宿 清流の郷 春田さん

周囲の山や農地を切り拓き体験施設を開業

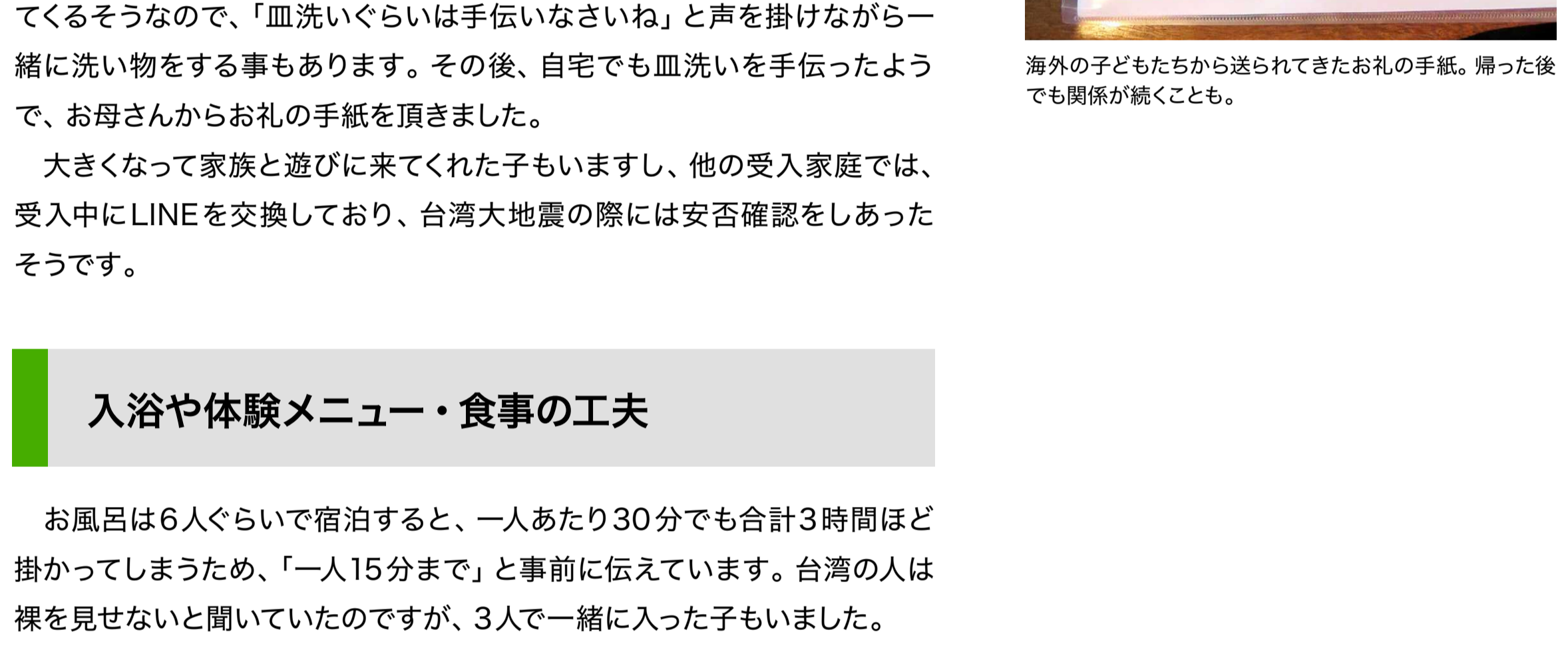


民宿の周辺の山や農地を自ら切り拓き、キャンプやバーベキューなどを楽しめる施設を開業。自作のジップラインを体験することもできます。

民宿の経営と並行して周辺の山や農地を切り拓き、ジップライン、キャンプ、バーベキューなどが楽しめる体験施設を自ら開業しました。フェイスブックやインスタグラムでの情報発信に加え、雑誌掲載やお客さんの口コミも集客の大きな力になっています。民泊は一人5,000円で、宿泊客は体験料が半額となり、体験を目的に訪れてもらうことを意識しています。

子どもたちが喜ぶ体験づくり

教育旅行の受け入れの際には、山奥という立地を活かし、多様な子どもたちを受け入れています。東京オリンピック開催の直前には、南スーダン・カンボジア・ネパールの水泳選手が合宿に訪れました。数ある体験の中でも特に人気なのは新割り体験で、自分で割った薪に火をつけてトーチにすると、子どもたちは夜になって火から離れようとなほいほです。また、自作のジップラインを安全に体験してもらうため、遊び方を説明するVR動画を作成し、VRゴーグルを用いた事前練習を行ってから実体験に臨んでもらうようにしています。



VOL.4 茶房たにひょう 谷さん

古民家を活用した受け入れ



元々古民家を改装して始めた飲食店で、後に民泊として開業。

「茶房たにひょう」は、元々1868年に建てられた古民家を改装して始めた飲食店で、8年前から民泊として教育旅行の生徒たちを受け入れています。修学旅行生を3～6名ほど受け入れていて、これまでに宿泊した生徒の数は約600名を超えます。主に女の子を優先して受け入れており、夜には海岸まで散歩へ出かけ、星空の美しさや、人がほとんどいない静けさに喜んで、道の真ん中で写真を撮ったりして楽しんでいます。

心を開く家庭的なおもてなし

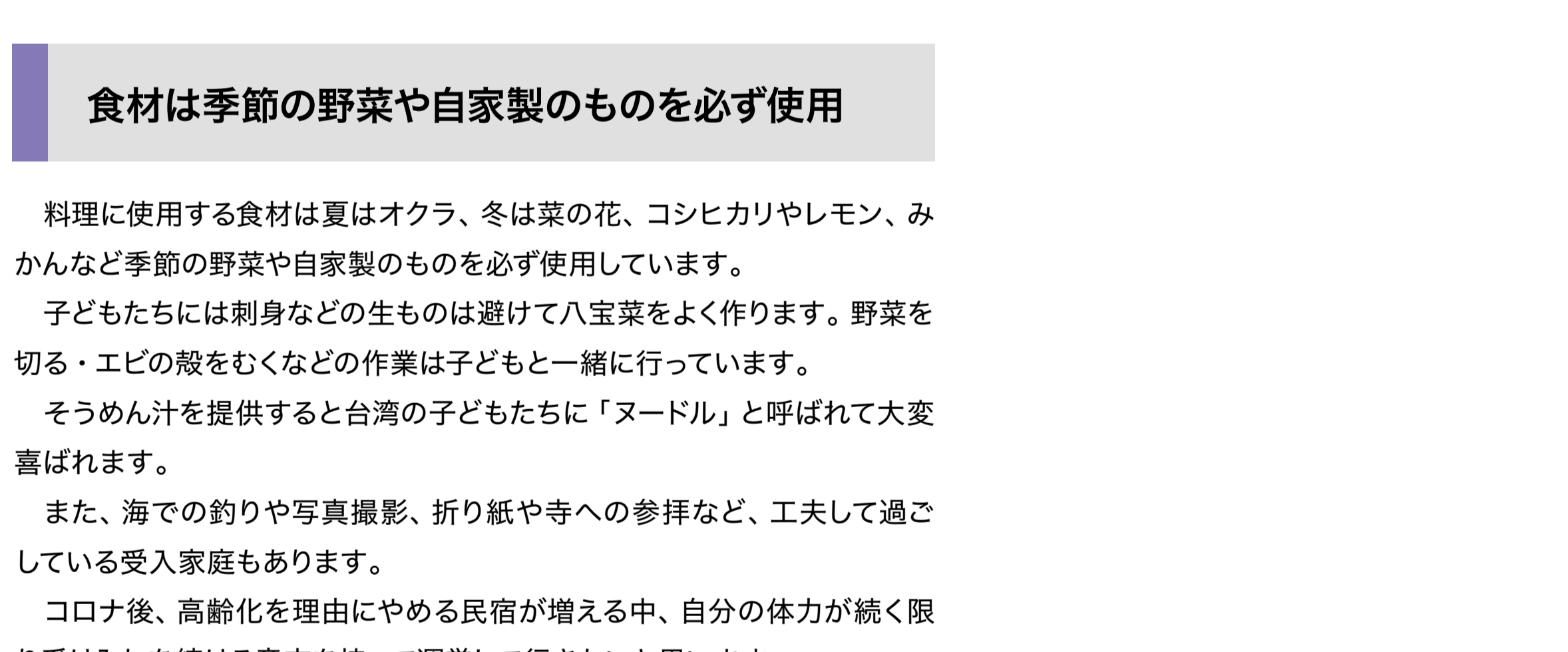


海外の子どもたちから送られてきたお礼の手紙。帰った後でも関係が続くことがあります。

海外の子ども・日本の子ども問わず、「家庭に迎え入れる気持ち」で臨んでもらいたいと思っています。特に台湾の子どもたちは日本のことが大好きです。「よく来たね」という気持ちで接することで必ず感動が生まれます。子どもたちは手作り料理を食べてくれます。特に朝食のオープンサンドはとても人気です。旬の料理を提供することを心がけ、野菜は産直で購入したものや自家菜園で収穫したものを使用しています。普段子どもたちが食べていないような食材を取り入れています。お母さんが毎日疲れて帰ってくるので、「血洗いぐらいは手伝いさないね」と声を掛けながら一緒に洗い物をする事もあります。その後、自宅でも血洗いを手伝ったようでお母さんからお礼の手紙を頂きました。大きくなって家族と遊びに来てくれた子もいますし、他の受入家庭では、受入中にLINEを交換しており、台湾大地震の際には安否確認をしあったそうです。

入浴や体験メニュー・食事の工夫

お風呂は6人ぐらいで宿泊すると、一人あたり30分でも合計3時間ほど掛かってしまうため、「一人15分まで」と事前に伝えています。台湾の人は裸を見せないと聞いていたのですが、3人で一緒に入った子もいました。体験はジャムづくり、折り紙、着物(浴衣)の試着などを用意しており、どれも好評です。魚が苦手な子には自家製ハムや鶏料理を提供し、野菜料理や郷土料理も残さず食べてくれます。また、共同調理では、お菓子作りを必ず取り入れているので、時間が掛からないように作業を前もって決めておきます。油の事故を防ぐため、揚げ物はできるだけ避けています。



VOL.5 農家民宿 クニ祐田 祐田さん

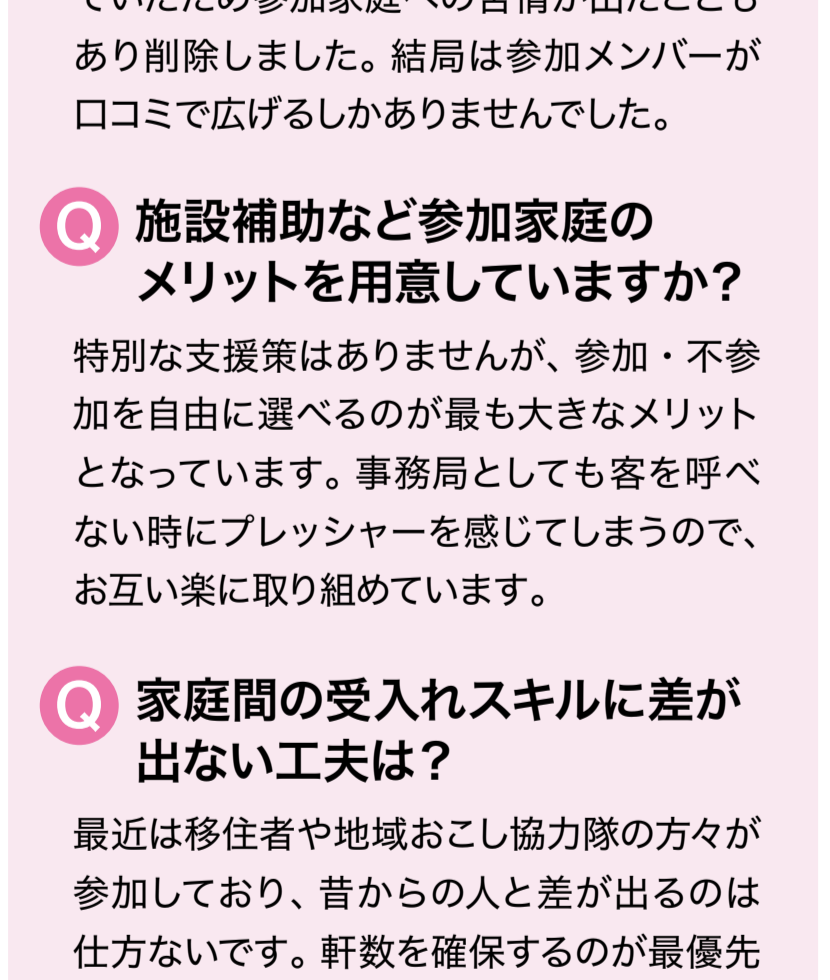
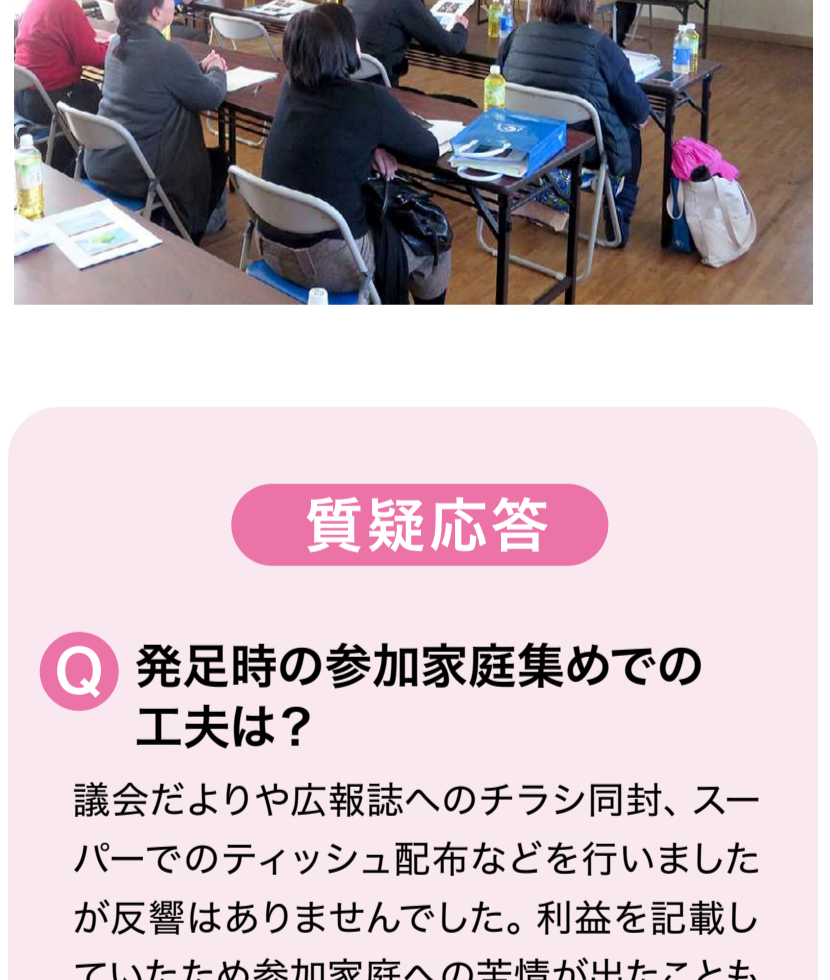
海への思い入れがある都会の人が興味を



料理に使用する食材はオクラ、菜の花、みかんなど季節の野菜や自家製のものを使用。

「クニ祐田」は、サーフィンに人生をかけていた若い頃のニックネームをそのまま屋号にしています。当時から書き溜めたブログは約4,000話以上に及びます。2000年に家を買ったことをきっかけに民宿を始めました。海への思い入れのある都会の人が興味を示してくれます。ひと月に10～20名ほどを受け入れており、ホテルの厨房を手伝った経験がある妻の料理はプロ並みと評判です。お遍路の需要に応え、遍路アプリ「遍路ヘルパー」に登録しています。

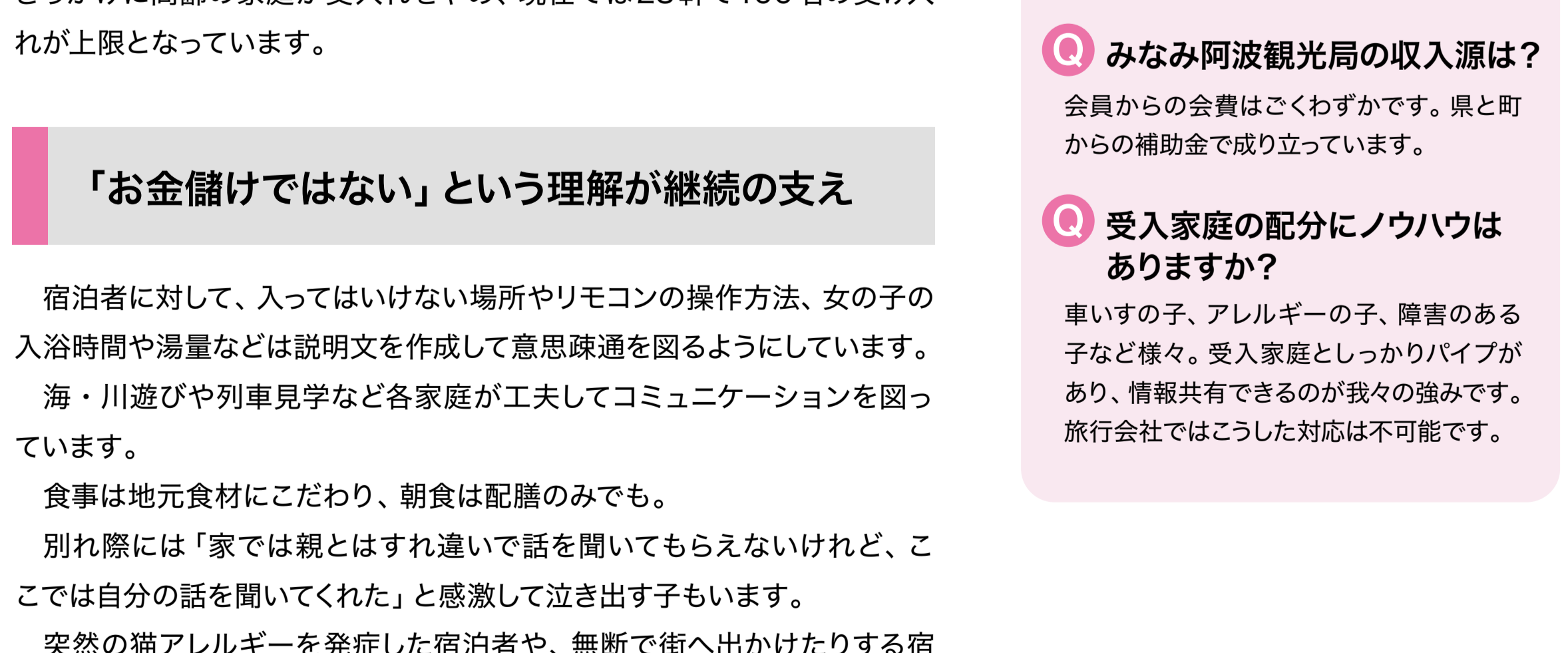
受け入れ時には趣味の話などで交流



受け入れの際には毎回顔を出してお客さんと交流するようにしています。楽しいことや趣味の話などを聞いてもらいつつ、人生を振り返るような話題は控えるようにしています。海外の方との言葉の壁は筆談と翻訳アプリを使って解消しています。海が近いので、子どもたちを受け入れるときは地震発生時の避難経路をきちんと説明しています。男子はスポーツカーに乗るのを楽しみにしていて、スポーツカーはコミュニケーションツールの一つになっています。台湾の商業高校の男子生徒たちもとても喜んでいました。女の子にはお風呂の時間について丁寧に説明しています。以前、トイレの紙を流す習慣が無かったのか、拭いた紙がそのまま床に置かれていたこともありました。

食材は季節の野菜や自家製のを必ず使用

料理に使用する食材は夏はオクラ、冬は菜の花、コシヒカリやレモン、みかんなど季節の野菜や自家製のを必ず使用しています。子どもたちは刺身などの生ものは避けて八宝菜をよく作ります。野菜を切る・エビの殻をむくなどの作業は子どもと一緒にしています。そうめん汁を提供すると台湾の子どもたちに「ヌードル」と呼ばれて大変喜ばれます。また、海での釣りや写真撮影、折り紙や寺への参拝など、工夫して過ごしている受入家庭もあります。コロナ後、高齢化を理由にやめる民宿が増える中、自分の体力が続く限り受け入れを続ける意志を持って運営して行きたいと思っています。



VOL.6 南阿波よくばり体験事務局 西沢アドバイザー

受入家庭の負担を減らす工夫



南阿波よくばり体験では、自然との共存・地域との交流をテーマに、64種類の体験学習・田舎暮らしにまつわるコンテンツを提供しています。学校側は受入家庭で長時間の体験を希望しがちですが、受入家庭の負担軽減のため、民泊と体験を別施設に分けて、バス集合場所を基点に体験施設へのスムーズな受け渡しができるように工夫しています。

発足の背景と地元の意思の変化

2004年の発足時、徳島県の観光部が主導して体験型観光を進めましたが、地元市町の反応は薄いものでした。その後、徳島県の農林部署からグリーン・ツーリズムを推進するために愛媛の四国研修会に参加してほしいと依頼があり、参加した事が転機となって徐々に地元の方が前向きになり、スタートしました。各町の既存施設を活用するため体験を組み合わせて誘客するのが目的で、ある意味生き残りや掛けをかけた苦肉の策でした。まずは平日の宿泊客を集めるために修学旅行を誘致し、次に漁業体験にも着目しましたが、漁協の了解や漁船からの登録変更が必要であるため、当時は全国でも2・3カ所しか例がありませんでした。

受入家庭を集めるために

徳島県では農林部が保健衛生部と連携し、民泊のガイドラインをいち早く設け、「学校長が認める学校行事であれば、必要な研修を受講すること」を条件に旅館業許可がなくても宿泊させても良い」という制度を作りました。同様のルールを自作しているのは、全国でも長崎・長崎県くらいだと思います。発足当時は、受け入れ家庭を集めるために、自治会やJAの総会后に時間を頂いて「民泊をやりませんか」と声をかけていました。不安のある家庭には旅行会社の担当者に宿泊してもらい、アドバイザーをもらいました。コロナ前はバス3台・140名の受け入れを行っていましたが、コロナをきっかけに高齢の家庭が受け入れをやめ、現在では23軒で100名の受け入れが上限となっています。

「お金儲けではない」という理解が継続の支え

宿泊者に対して、入ってはいけない場所やリモコンの操作方法、女の子の入浴時間や湯量などは説明文を作成して意思疎通を図るようにしています。海・川遊びや列車見学など各家庭が工夫してコミュニケーションを図っています。食事は地元食材にこだわり、朝食は配膳のみでも。別際には「家では親とはすれ違いで話を聞いてもらえないけれど、ここでは自分の話を聞いてくれた」と感激して泣き出す子もいました。突然の猫アレルギーを発症した宿泊者や、無断で街へ出かけた宿泊者、酔った父親の乱入などのトラブルもありましたが、「お金儲けではない」という各家庭の理解が継続の支えになってきました。

質疑応答

Q 発足時の参加家庭集めの工夫は？

議会日より広報紙へのチラシ同封、スーパーでのティッシュ配布などを行いました。反響はありませんでした。利益を記載していたため参加家庭への苦情が出たこともあり削除しました。結局は参加メンバーが口コミで広げることがありました。

Q 施設補助など参加家庭のメリットを用意していますか？

特別な支援策はありませんが、参加・不参加を自由に選べるのが最大のメリットとなっています。事務局としても客を呼ぶためにプレッシャーを感じてしまうので、お互い楽に取組んでいます。

Q 家庭間の受け入れスキルに差が出ない工夫は？

最近では移住者や地域おこし協力隊の方々も参加しており、昔からの人と差が出るのは仕方ないです。軒数を確保するのが最優先になっており、お隣りの阿南市の家庭にも営業をかけています。

Q プロモーションはどのように？

広島、福山へ営業に行った程度です。低予算でいかに効率よくするか、大手旅行会社に依頼して営業してもらうのが現状で、予算を使ったプロモーションはできません。

Q みなみ阿波観光局の収入源は？

会員からの会費はごくわずかです。県と町からの補助金で成り立っています。

Q 受入家庭の配分にノウハウはありますか？

車いすの子、アレルギーの子、障害のある子など様々。受入家庭としっかりパイプがあり、情報共有できるのが我が社の強みです。旅行会社ではこうした対応は不可能です。

VOL.7 まぜのおか 味覚体験 ガイド役：石元さん

限られた時間で工夫する体験

魚を捌く工程にはしっかり時間を割いている。「まぜのおか」の3つの注意点を質問形式で伝えている。

体験時間は全体で2時間しかありません。食事時間を考慮して体験は1時間に収まるようにしていますが、魚を捌く工程にはしっかり時間を割いています。子どもたちの意識を高めるために「衛生面で気を付けることは?」「包丁の持ち方は?」「火を扱う時に注意することは?」という感じで3つの注意点を質問形式で伝えています。方言を交えることで一気に距離が縮まり、話をよく聞いてくれます。

子どもや孫が遊びに来たと思えば苦にはならない

年間10校ほど教育旅行を受け入れており、4～6月、10～12月に集中しています。受け入れを始めた当初は、事務局が頑張って誘致してくれたので、21日間連続で宿泊を受け入れたこともありました。みんなが疲れてしまえば無理のない数に調整しています。当時は味覚体験の受入れも多々、仕入れや準備に苦労した時期もありましたが、やればできるものでね。自分の子どもや孫が遊びに来てくれたと思えば苦にはなりません。いつも「どんな子に会えるかな」と楽しみにしています。

アレルギー対応は徹底していますが、好き嫌いは工夫しながら食べてもらえます。野菜で出汁をとったスープなど、魚介類を使わなくてもシンプルでおいしい料理を提供するように心掛けています。特別なことをする必要はなく、子どもたちとの会話そのものを楽しんでもらいたいです。

